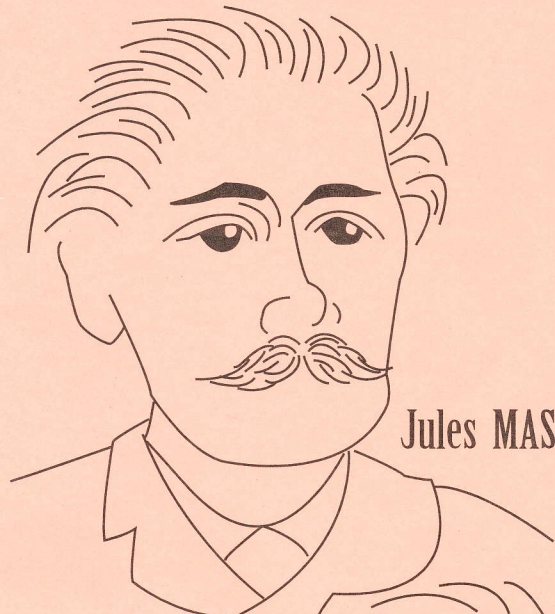
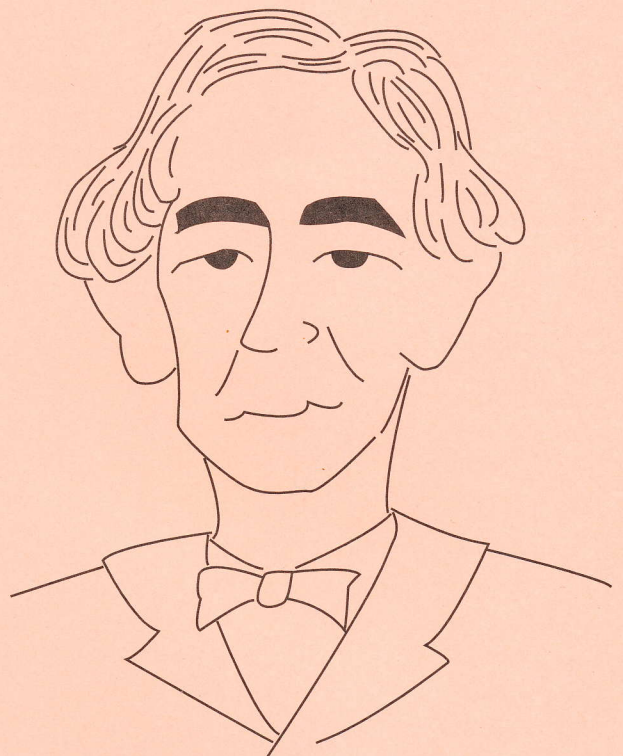


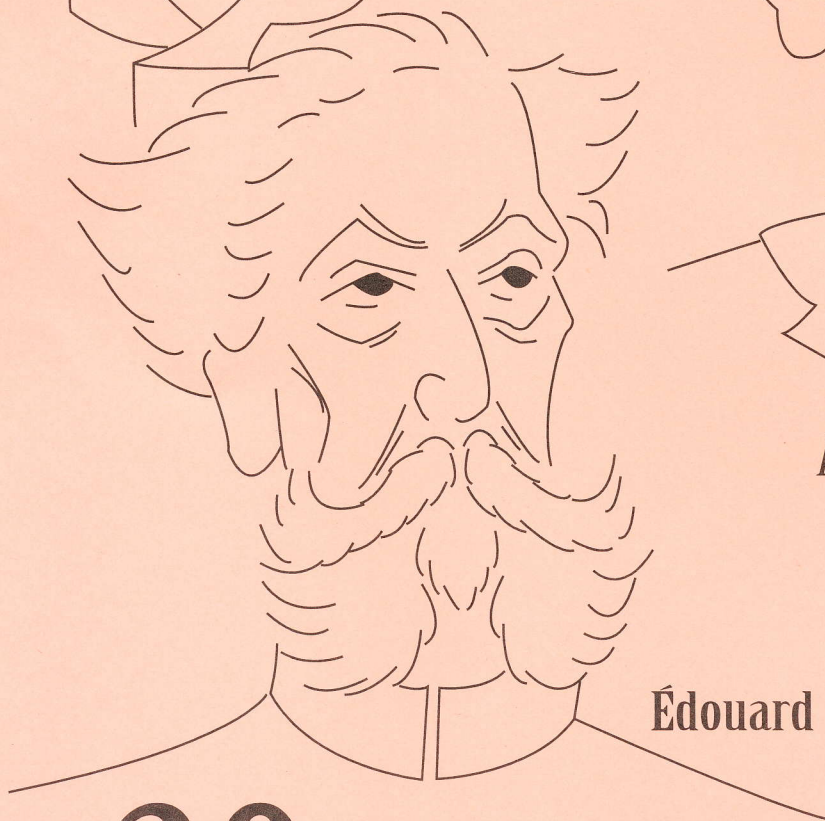
# Philomusica Orchestre de Kyoto



Jules MASSENET



ABE, Komei



Édouard LALO

# Le 30me concert

Le 23 décembre 2011



## ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な、しかも楽しい音楽経験を積み重ねて、はや第30回目となりました。今回の演奏会は第5、10、23回で指揮して下さいました、池田俊氏をお迎えし、先生のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、魅力あふれる交響曲を披露してくれるものと期待致しております。

本日の聴き所は、安部幸明作曲の交響曲第1番です。安部幸明先生は1911(明治44)年9月1日広島県に生まれ、今年生誕100年にあたります。交響曲第1番は1957年に文部省芸術選奨を受賞された作品です。先生は京都にもなじみが深く、当時平安神宮の西隣りにありました京都市立音楽短期大学教授を務めていらっしゃいました。今は「武徳殿」になっています校庭を、散策していらしたお姿が私には懐かしく思い出され、今回の演奏を大変楽しみにしています。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました会員の皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田之宏

「ドレミファソラシド」のなかのソの音を属音といいます。このソの音はとても重要な音で、音楽の調性を支配しています。調の覚え方で便利なのが五度圏(ごどけん)なのでここで紹介しましょう。時計の針の12時をハ長調とすると、ドレミファソと五つ数えて五番目にソが来ます。ここが1時でト長調(＃ひとつ)、さらにソラシドレと五つ数えて五番目はレが来るのでここが2時でニ長調(＃ふたつ)です。逆に12時からドシラソファと五つ戻ると五番目はファですね。ここが11時でヘ長調(＼ひとつ)と言った具合です。これを続けると時計の文字盤に12音すべてが乗っかります。これが五度圏です。

私たちはさまざまな調性の音楽を演奏します。一曲のなかでも目まぐるしく転調する曲も取り上げます。そんななかで、今自分が出している音が何調の何の音かを全員がきちんと把握しています。どんな音程が美しく響くのか、音量バランスはどうすればいいのか練習で細かく吟味しています。きょうの演奏にそんな配慮をくみとっていただければうれしいです。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡武志

## お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- ・携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。
- ・演奏中の私語は固くお断りいたします。
- ・客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- ・補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- ・演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- ・「咳エチケット」にご協力ください。咳、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- ・演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

京都芸術センター制作支援事業

# 京都フィロムジカ管弦楽団 第30回定期演奏会

2011年12月23日(金) 午後2時開演 京都府長岡京記念文化会館

1:15～ ロビーコンサート

♪ Programme ♪

ジュール・マスネ(1842-1912) / 管弦楽組曲第4番『絵のような風景』

Jules Emile Frédéric MASSENET : Scènes Pittoresques, 4me Suite d'Orchestre

- |             |                   |
|-------------|-------------------|
| I. 行進曲      | I. Marche         |
| II. バレエの雰囲気 | II. Air de Ballet |
| III. お告げの祈り | III. Angélus      |
| IV. ボエームの祭  | IV. Fête Bohème   |

安部 幸明 (1911-2006) / 交響曲第1番

ABE, Komei : Symphonie n° 1

- I. Allegro con brio    II. Adagietto    III. Vivace assai

— 休憩 —

エドゥアール・ラロ (1823-1892) / 交響曲ト短調

Victor Antoine Édouard LALO : Symphonie en sol mineur

- I. Andante - Allegro non troppo    II. Vivace    III. Adagio    IV. Allegro

指揮 池田 俊

## ♪ ロビーコンサート ♪

### デュカス / 『ラ・ペリ』 より ファンファーレ

Trb. : 宮下、馬瀬、藤井舞    Tub. : 中塚

フランスの作曲家デュカスが舞踏音楽『ラ・ペリ』を演奏会用に編成し直した時に追加された金管楽器のためのファンファーレです。本日は3本のトロンボーンとチューバにより演奏します。演奏会の最初を飾る景気付けになればいいのですが。。(宮下)

### シューベルト / 弦楽四重奏曲『死と乙女』 より 第2楽章

Vn. : 芦原、村中    Va. : 塩井    Vc. : 小野

曲のタイトルにもなったテーマを元にした変奏曲。短調の音の重厚さ、合間の長調の美しさなど、今年一年を振り返りながら耳を傾けて頂ければ幸いです。(芦原)

### ドボルザーク / 管楽セレナード より 第1、4楽章

Ob. : 栗山、坂田    Cl. : 関、南井    Fg. : 石塚、橋場    Hr. : 黒田、坂口、草木  
Vc. : 多田    Cb. : 藤井輝

セレナードといってもモーツァルトみたく貴族のパーティーに奏される音楽ではなく、ボヘミアの草原で繰り広げられる宴のような音楽です。今回は1、4楽章を演奏します。気を楽にして聴いていただければ幸いです。(藤井輝)



## 指揮者

### 池田 俊 (いけだ しゅん)

兵庫県西宮市生まれ、大阪音楽大学において指揮法を研鑽、トランペットを斉藤広義氏に師事。

卒業後、大阪フィルハーモニー交響楽団からのオファーを受け入団。在団中ドイツのデトモルト国立音楽大学へ留学。指揮法、室内楽、トランペットを学び、再び大阪フィルに首席奏者として迎えられる。

大阪シュベルマー金管アンサンブルのコンサートにおいて指揮とトランペットを兼ね[奨励賞] [本賞]を受賞。

1995年、大阪フィルを退団し本格的に指揮活動に入る。

1997年、ブリスベン国際プラス・フェスティバルに招かれ、クインズランド音楽院でのマスター・クラスでオーケストラに関する演奏法やソロの指導と共にコンクールの審査も務める。

1998年、関西フィルハーモニー管弦楽団と共に [池田俊 指揮者デビュー・コンサート] を開催し、「豊かな音楽性を持つ才能ある指揮者！」と絶賛され、[神戸っ子] のブルーリボン賞候補に指揮部門でノミネートされる。

2001年、ブルガリア国立室内オーケストラを指揮し好評を得る。

2004年、ブルガリアに渡欧し、第1回ワークショップにおいてブルガリア国立ソフィアフィルを指揮しディプロマを授与。

2009年、ウクライナのキエフ(リーセンコホール)においてウクライナ国立交響楽団を指揮し、スタンディングオベーションを受ける。

また関西フィル、大阪交響楽団、広島交響楽団、奈良フィルハーモニー管弦楽団、エウフォニカ管弦楽団、ウインドカンパニー管楽オーケストラ等で指揮。近年は大阪市音楽団からも招かれている。

アマチュアの分野においては京都フィロムジカ管弦楽団、樫原交響楽団、墨染交響楽団、八尾フィルハーモニー交響楽団、立教大学交響楽団、西宮市吹奏楽団、その他等で客演指揮者として招かれている。

現在はプロ、アマを問わない多彩な指揮活動を行い、特にアマチュアのオーケストラや吹奏楽団などからは演奏向上に力を注いでいる「下町の名指揮者」として評価を受けている。

日本指揮者協会会員

高知大学交響楽団 (常任指揮者)

香芝シティ室内オーケストラ (専任指揮者)

JAPANアカデミー・トランペットアンサンブル指揮者 (音楽監督)

奈良教育大学非常勤講師



### ご旅行は日本教育旅行で！！

各種旅行会社 (JTB・日本旅行 etc) 国内・海外パンフレット取扱い可能！！

他にもスポーツ・音楽合宿、スキー旅行、団体旅行も取り扱っております。

日本教育旅行株式会社

京都市下京区下数珠屋町通東洞院東入

TEL : 075-351-0405

<http://www.net-freeway.com>

担当 藤田 珠里

印刷のことなら

# 大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727 (代)

FAX (075) 256-4604

# 曲目解説

Tp.遠藤 啓輔

僕は名曲・珍曲取り混ぜて万遍無くコンサートを聴きに行くように努めているが、特に滅多に演奏しない曲を主体にしたコンサートを聴いた後だと、「難しかった」「分からなかった」と会話しながら帰っていく聴衆たちをよく見る。そのたびに僕は「音楽は難しいのか？ 分かる・分からないとは、どういうことか？」という疑問を我がこととして思案している。

多くの人は、クラシック音楽を「難しい」と思っているのではないだろうか。その通り！ やはりクラシック音楽は難しい。クラシック音楽を鑑賞するには大変な集中力を持って作品に真剣に対峙しなければならない。しかし、そもそも難しくないと道楽なんて有り得るのだろうか？ 僕は勝負事をしないし文学にも疎いから詳しいことは知らないけれど、将棋だって俳句だって、難しいからこそ取り組み甲斐があるんじゃないの？ 音楽は道楽なのだから、「難しい」ということは、すなわち「楽しい」ということなんじゃないの？

また、音楽が「分かる」ということは、そもそも有り得ることなのだろうか？ 僕は今まで音楽を聴いて「分かった」と思ったことは無い。誰よりも深く愛していると自負するブルックナーやシベリウスの作品を聴いたときでさえ、「僕はなぜこれほどまでに感動するのか？」という究極の謎は深まる一方だ。人と音楽について話していると、どうやら「分かりやすい音楽」とは「聞き覚えのある音楽」ということのように思われる。たしかに聞き覚えのある「分かりやすい」音楽を聴くことも楽しいけれど、それらばかり選んで聴いているのでは、目新しい感動に触れる機会を自ら奪ってしまっているようで勿体ない。こんな僕の思いを見事に代弁した一文を見つけたので紹介したい。

…「好む」感情には、往々「分かる」が含まれているものだが、「分かる」人々は、すでに知っている世界にはまった部分だけを抜き出して得心していることが多い。「分からない」こそが、新しい世界、知らない自分への始まりなのに、自らの可能性を閉ざしてしまうのである。(伊藤智永) 注1

今回のフィロムジカのプログラムは、いつもにも増して難しく、分かりにくい曲を取りそろえた。難しい音楽と向き合う面白さ、分かりにくい曲から目新しい発見を得る喜びを、存分にご堪能いただきたい。

## マスネ／管弦楽組曲第4番『絵のような風景』

クラシック音楽の「難しさ」の理由の一つは、理屈に合った形式を重んじている点である。和歌や漢詩が形式の芸術であると同様に、クラシック音楽も形式の芸術である。中心主題を軸にして、「反復」「対比」「変化」などを通して展開をする。この音楽の展開の仕方とくに説得力を感じさせるものが形式として定着していった。そして、この形式の美しさを堪能するには聴き手にも相応の集中力が要求される。

こうした「難しい」クラシック音楽作品の中にあって、19世紀から20世紀を生きたフランスの作曲家・マスネが作曲した管弦楽組曲群は比較的聞くにやさしい曲といえよう。変化の説得力よりも、旋律の美しさやオーケストラの色彩感の効果の方により作曲の力点が置かれており、そうした音のスペクタクルを気軽に楽しむ聴き方も可能だからだ。マスネがこのような作品を書いた背景には、マスネがオペラ作曲家だったことと関係しているように思う。マスネは「管弦楽組曲」と題した作品を7曲書いているが、それらはいずれも、『マノン』や『タイス』といった代表作たるオペラを書くまえの若い時期の作である。これは僕の憶測にすぎないが、マスネはオペラ作曲家としての技量向上のために管弦楽曲の作曲という課題を自らに与えていたように思われる。そのため、彼の管弦楽組曲は、変化の説得力よりも、聴衆をとらえる旋律美や絶妙なオーケストレイションの冴えに重点が置かれているのではないだろうか。とりわけ見事なのは簡潔なオーケストラから生み出される色彩感だ。マスネはパリ音楽院で学ぶ傍ら、生活費を稼ぐためにオーケストラでティンパニ奏者として働いていた。文字通り叩き込んで身につけたオーケストラの知識が役立っているのだろう。

本日演奏する管弦楽組曲第4番は『絵のような風景』と題されている。フィロムジカが17回定期で演奏した

マスネの管弦楽組曲第3番『劇的風景』は着想を得たシェークスピアの劇名が楽譜に明記されているが、この『絵のような風景』にはそのような説明は書かれていない。文字通り、絵が思い浮かぶごとく情景描写がなされた音楽、ととらえるのが良さそうだ。組曲は4曲で構成される。

**第1曲**は『行進曲』と題されている。ただし、厳めしい行軍のイメージとは程遠い、可愛らしい音楽だ。子供の夢の中でおもちゃの兵隊たちが一步一步ゆっくりと歩いている様が連想される。軍隊ラッパが吹き鳴らされるが、これもまたおもちゃのように可愛らしい。

**第2曲**は『バレエの雰囲気で』。金管楽器をホルンも含めてすべて休ませた簡潔なオーケストラが軽やかなステップを踏む。この曲の主演はチェロで、哀愁を帯びた旋律を艶やかに歌う。打楽器で唯一トライアングルが用いられており、この楽器の輝かしくもひそやかな音色が音楽に程好い煌めきを与える。打楽器出身の作曲家マスネの本領が発揮された見事なオーケストレーションだ。

**第3曲**は『アンジェラス (お告げの祈り)』。この曲の題名を「夕べの鐘」と訳しているのを見ることがあるが、それは誤訳であろう。曲のイメージの根幹にかかわることなので題名について少しこだわっておきたい。『アンジェラス (Angelus)』とはカトリック教徒が朝・昼・夕の3度、毎日行う祈りのことである。祈りの文言が「Angelus Domini…」で始まる受胎告知を賛美する内容であることから、この祈りをヨーロッパ語圏では「Angelus」、日本では「お告げの祈り」と呼んでいる。さらに、Angelusの時刻になったことを知らせる教会の鐘の音をも Angelus と呼ぶようになった。したがって Angelus は一日に3度あるのだから「夕べ」に限定するのはおかしなことだが、ミレーの名画『L'Angelus』が『晩鐘』の邦題で有名になったことから、Angelus に「夕べ」のイメージがついてしまったのだろう。ミレーの『L'Angelus』は夕景が描かれているので夕刻の「お告げの祈り」の風景であることに誤りはなく、「三井の晩鐘」(大津市・園城寺) はじめ日本人の郷愁を呼び覚ます言葉「晩鐘」とも良く響きあう画風である。しかしだからといって、マスネの『Angelus』を夕刻の情景と解する必要はない。この曲中では鐘の音色が模倣されるが、これらは大きく見れば曲の前半、中ほど、終盤、の3箇所でも鳴らされており、朝・昼・夕の3度の鐘を表現しているとも見ることが出来る。そうするとこの曲は、祈りで明け祈りで暮れる庶民のつましい一日の生活を描いた作品、と取れるのではないだろうか。なお、鐘の音はホルンの強奏に弦のピツィカートを重ねて表現される。ホルンだけでは打撃音の鋭さが表現しきれないから、ピツィカートを重ねたのだろう。ただし、曲の中ほどで聞かれる鐘の音にはピツィカートが重ねられず、どこか遠くから聞こえてくるようなホルンの音のみで鐘が表現される。朝と夕の鐘は教会に近い村の中で聞いているのに対し、正午の鐘は村から離れた畑で聞いているのだろうか、など想像が膨らむ。やはりマスネのオーケストレーションは見事だ。

**第4曲**は『ボエームの祭り』。ボエームの文字どおりの意味はボヘミア(現在のチェコ)の人々のことであるが、非定住の民族がこの地域から来た、との俗説から、ロマなど移動型の民族を指すことがある。流浪の民としての「ボヘミアン」は、根無し草として蔑視される反面で、権力におもねらぬ人々というある種の敬意をも持たれていた。マーラーが自らを「ボヘミアン」と称したことや、極貧の生活の中でも誇りを失わない芸術家たちを描いたプッチーニのオペラ『ボエーム』はそのことを示す好例だ。マスネのこの曲も、洗練とは程遠い野卑で力強いリズムとともに、誇り高い輝かしさが満ち溢れている。ロマの音楽はオスマン帝国の軍楽隊の影響を受けていたためか、この楽章から倍加されたトランペットの荒々しいファンファーレで始まる。また、中間部はヨーロッパで広く見られる民族楽器のバグパイプを彷彿とさせる野太い音色で歌われる。

## 安部幸明／交響曲第1番

多楽章形式の管弦楽作品、という点はマスネの管弦楽組曲と同じなのだが、この作品を安部は敢えて『交響曲』と題した。ベートーベンが音楽史に君臨する傑作交響曲群を書いて以降、「交響曲」というジャンルは管弦楽曲の中でも特別な重みをもつものとなった。「交響曲」は、起(第1楽章)承(遅い楽章)転(舞曲風の楽章)結(フィナーレ)という簡潔にして効果的な配列による楽章構成を持ち、各々の楽章はソナタ形式など反復・対比・変化を基調とするクラシック音楽が生み出した形式美を備えており、しかもそれぞれの楽章が調性や構成要素の

共通性などで首尾一貫したつながりを持っている、という完結した小宇宙を構成していることが理想形となり、シンフォニストたちは、この理想形を一層深く突き詰めるか、あるいは大胆に逸脱するかして、独自性を発揮することが求められるようになった。安部の「交響曲第1番」も当然そうした交響曲の偉大な歴史に果敢に挑んできた傑作だ。

この作品は、多くの優れた交響曲がそうであるように、曲全体を通して主題の要素が緊密なつながりを持っている。たとえば、各楽章の冒頭を譜例1・2・3で示したが、それぞれ全く異なる個性を持つようにみえる主題が、実は共通の要素(a、b、c)を用いて作られていることがお分かり頂けるのではないだろうか。もちろん、音楽鑑賞はクイズではないのだから、旋律を聴きながら「今の主題はさっきの主題とどう共通性があるんだ？」などと詮索しながら聴く必要など全く無い。さまざまに表情を変化させて進行する音楽が、しかしながら決して無関係な音の羅列ではなくどこかまとまりを感じさせる、この不可思議な体験を楽しむことができれば交響曲を聴く醍醐味を満喫できたというものである。

Violini I

Tromboni

譜例1 第1楽章冒頭

Violincelli

譜例2 第2楽章冒頭

2 Clarineti  
in La

譜例3 第3楽章冒頭

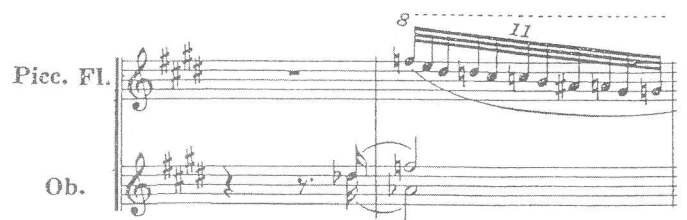
一方で、交響曲の定型を取って逸脱した大胆さにも惹かれる。4楽章構成で書かれることが多い交響曲の定石から逸脱した3楽章構成で書かれているが、これは起承転結の「転」に相当するスケルツォ楽章を欠くためだ。そのかわり曲全体がスケルツォ本来の「諧謔曲」的な激しさと遊び心に満ちている。随所にブラック・ユーモア的な冗談がちりばめられており、権威ともいべき楽曲形式である「交響曲」を笑い飛ばしているような感がある。たとえば第1楽章の第2主題。定石どおり柔和な旋律で書かれており、グリッサンドを多用したヴァイオリンの艶っぽい演奏で提示される。この第2主題は形式に従って再現部でも演奏されるが、なんとコントラバスまで加わった低弦が提示部同様グリッサンドを多用して演奏するのだ。図体の大きなコントラバスと艶やかなグリッサンドという取り合わせは何とも奇妙で滑稽だ。あるいは人を食ったような曲の締めくくりにも啞然とさせられる。ベートーベンのようなフル・オーケストラによる大団円でもなければ、マーラー9番のごとく「死にゆく様に」消え入る終わり方でもない、ほとんど冗談音楽と言って良いような、交響曲としてはあまりにも大胆な終わり方である。

**第1楽章：**快活な速いテンポが指定されているが、低音で打ち込まれる伴奏リズムが重々しい印象を与え、ブルドーサーが猛スピードで爆走するような理屈抜きのパワーを感じさせる。

**第2楽章：**沈痛な遅い楽章で、パワフルな第1楽章とは見事な対照をなす。この楽章の主役はチェロであり、もともとチェロ奏者だった安部の横顔が覗く。また、管楽器の主役はイングリッシュホルンだ。この楽器はオーボエとファゴットの中間に相当し、どっちつかずの不安定な音色を持つ。この音はドヴォルジャークの『新世界より』に代表されるような素朴で鄙びた旋律に見事に親和する一方で、ショスタコーヴィチの作品で聞かれるような、怒りとも慟哭ともつかない人間の赤裸々な感情を告白するような表現も得意とする。はたして安部はどちらの使い方をしているのだろうか。

**第3楽章**：再びテンポの速い荒々しい音楽となる。半音階の上昇や加速するようなりズムなど、他作品にも使用した安部お好みの要素がふんだんに盛り込まれる。この楽章ではオーケストレイションの見事さがとりわけ際立つ。たとえばスルポンティチェロの多用だ。スルポンティチェロとは弦楽器から金属的な硬い音を出す特殊奏法（といっても、駒寄りに弓を当てて弾くという簡単なもの）だが、これを取り入れることで音色の絵具を増やしているのだ。この曲の楽器編成は近代以降の音楽としては異例なほどシンプルで、得体の知れない特殊楽器を投入して奇をてらうことはない。しかしながら、こうした特殊奏法を効果的に取り入れることで特殊楽器の音に慣れてしまった現代人の耳にも斬新な音響が届くのである。あるいは**譜例4**のように、フライング気味に突入したオーボエをフルートの下降音型が引き継ぐ部分がある。この動機の主役はあくまでもフルートの華やかな音色であるが、冒頭だけをオーボエの硬質な音で吹くことによって、アタックが弱いというフルートの弱点を克服しているのだ。オーボエ奏者がこの部分をどんなにしっかりと吹いてもオーボエの音が聴衆に識別されることは絶対に無い。しかしながらフルートの下降音型が聴衆にきらびやかに届いたとき、それはオーボエ奏者がしっかりと仕事をしたことの証左となる。各々の楽器が引き立て合って全体の響きを作る、という、まさに究極のオーケストレイションと言えよう。

**譜例4 第3楽章（一部）**



このような独創的な交響曲を書いた安部は1911年広島生まれ。この作品は彼が40歳代に作曲した作品で、壮年期の作曲家の野心的な創作意欲と円熟した技法とが邂逅した奇跡的な傑作だ。彼はその後、多くは作品を発表せず、京都市立芸術大学の初代音楽学部長に就任するなど、作曲家としてよりもむしろ教育者として活躍した。亡くなったのは2006年で、作曲家としての評価はこれから高まっていくものと期待される。

なお、スコア（総譜）が出版されているにもかかわらず、パート譜が入手できないという予想外の事態に直面。やむなく我々は、許可を得て各自手書き（手書きと言っても多くの団員はパソコン入力で作成したが）でパート譜を作成した。このパート譜は今回の演奏会のためだけに特別に作らせてもらったものなので、演奏後は破棄しなければならない。非常に魅力的でありながらも何故かほとんど演奏されない作品が世の中には数多く存在するが、その理由がこのような実にくだらな事情であることは少なからずある。

## ラロ／交響曲ト短調

同じ「交響曲」でも、安部の交響曲が定石からの逸脱の大胆さに大きな魅力があったのと比べると、ラロの交響曲は「交響曲」の理想形を徹底的に追求した作品だ。中間にアダージョ楽章とスケルツォ風の楽章を配した4楽章構成で、しっかりとした形式美を備えた各楽章の充実ぶりは、特殊楽器を一切使用しない簡潔な楽器編成とも相まって、ほぼ同時代の作曲家・ブラームスの交響曲以上に古典的だ。作曲者ラロのパリ音楽院時代の師フランソワ＝アントワヌ・アブネックは20年間に183回のコンサートでベートーベンを指揮したといわれるほどベートーベンに傾倒した人物だったが<sup>註2</sup>、そうした師からベートーベンの交響曲の素晴らしさを徹底的に叩き込まれたことは想像に難くない。この交響曲はラロ晩年の作品だが、人生の終幕にあたり越え難い巨峰であるベートーベンの交響曲に挑もうと奮戦する老作曲家の姿が浮かんでくる。同時に、「ト短調」という調性からは、もう一人の巨星・モーツァルトを連想しないわけにはいかない。41番まであるモーツァルトの交響曲のうち、短調の作品はわずかに2曲、しかもその2曲ともがト短調だ。ト短調という調性は短調の中でもとりわけ不快な苦しさに満ちたものとされる反面、弦楽器が鳴りやすいので重宝されてきた歴史があるそうだが<sup>註3</sup>、モーツァルトによってさらに新たなイメージが付加された。慄然とさせられるような厳しさに満ちた25番、憂いと慟哭が芸術的な高みに昇華した音楽史の至宝40番、ト短調という調性で交響曲を書くということは、モーツァルトの



この2傑作への挑戦ということに他ならない。

このように古典の交響曲への強い意識がうかがえる一方、ラロならではの個性も盛り込まれている。ラロはフランス北部で生まれパリで学んだフランスの作曲家だが、家系はスペインにルーツを持つ。ラロの最も（というよりはほとんど唯一）演奏される作品が『スペイン交響曲』（「交響曲」と題されてはいるが、実質的にはヴァイオリン協奏曲）であるのは実に象徴的だ。今回演奏する交響曲ト短調は、そうしたラロならではのスペイン的要素とフランス的要素がうかがえる。この曲には「セッコ（secco）」の表情指定が頻繁に出てくる。これはスタッカートやアクセント以上に短くきつい表現を求める指示であり、「セッコ」の激しい乾いた音を聴くと、イベリア半島の熱く乾いた大地では音もこのように乾いているのだろうか、と想像が膨らむ。そして、この「セッコ」の表現に似つかわしい情熱的で昂ぶるようなリズムが全曲を貫いている。ト短調という最も苦痛に満ちた調性と扇情的なリズムの取り合わせ、これは、厳しい自然の中での苦痛に満ちた生活の中でも音楽の力で魂を鼓舞して逞しく生きる人々を連想させる。その一方で、宗教音楽的な旋律（譜例6・7）が不意に顔をみせ一瞬の安らぎをもたらす。僕たち日本人にとってスペインはキリスト教を最初に伝えた国であるため、カトリックの信仰が盛んな国というイメージがある。ラロの作品に垣間見える宗教音楽的な旋律は、そうした祈りの国としてのスペインを彷彿とさせる。

また、フランスの作曲家としての個性は「固定楽想（イデー・フィクス）」を導入する点によく表れている。「固定楽想」は各楽章の要所に登場し全曲を結びつける主題であり、フランス音楽の太祖ベルリオーズが『幻想交響曲』で「恋人の主題」を固定楽想として各楽章に登場させた。主題の共通性によって曲全体に統一感を持たせる努力はあらゆる交響曲に見られることだが、「固定楽想」はほとんど変化せずに再帰される点がかえって面白く感じられる。ラロの交響曲では、冒頭で弦楽器によって重々しく提示された主題（譜例5）がほぼそのままの形で、運命の打撃のように全曲の要所で登場する。

**第1楽章：**コントラバスがト短調の根音（ソ）で先導したのち、弦楽器が低音で固定楽想（譜例5）をゆっくりと提示する。遅い序奏部分は重々しさと慟哭のような激しさを伴う。速めの主部に入ってからでも激しい雰囲気は変わらないが、第2主題は花園的な穏やかさを得る。楽章終盤では、固定楽想の変化形である輝かしい賛美歌風の旋律（譜例6）が劇的に登場する。

**第2楽章：**スケルツォに相当する楽章で、疾走する主部と遅く重々しい中間部が対比される。不協和音の強打で衝撃的に始めると、木管や弦がコミカルに遊びまくる。8分の6拍子で書かれており、2拍子的なスピード感と3拍子的な躍動感を変幻自在に使い分ける。楽しげな主部から一転して、中間部は聖堂で静かに座しているような厳粛さをもった音楽に変貌する。固定楽想（譜例5）を宗教音楽風に変化させた旋律が沈痛な表情で歌われると、弦楽器が重苦しく這いずり回り、管楽器が慟哭のように叫ぶ。形式どおりに楽しげな主部が再現されるが、最後はテンポを緩めて終わる。遅い第3楽章へのブリッジの役割を果たしているのだろう。

**第3楽章：**神々しく温かい表情を持ったアダージョ楽章である。テンポは遅いが、3拍子の律動感が生命力をもたらす。クライマックスでは慈愛に満ちた表情のまま雄大に高揚するが、突如、青天の霹靂のように固定楽想（譜例5）が立ち上がる様はきわめて荘厳だ。最後はゆったりと眠りに落ちるように閉じられる。

**第4楽章：**安息の眠りを覚ますように、固定楽想（譜例5）に律動感を加えた鋭い主題で攻撃的に始まる。せわしないリズムが感情を昂ぶらせるが、一方で譜例7のような宗教曲風の旋律が現れ束の間の安息をもたらす。終盤では賛美歌風の旋律（譜例6）が一瞬の輝きをもたらすが、重々しい固定楽想（譜例5）が再帰すると、苦痛に満ちたト短調のまま、ソ・シ♭・レの和音を打ちつけて終わる。



譜例5 固定楽想



譜例6 固定楽想の変化形（第1・4楽章で聞かれる）



### 譜例7 第4楽章（一部）

このようにラロが生涯の終幕に挑んだ交響曲は、古典的交響曲の伝統にフランス音楽的技法とスペイン的な気質が盛り込まれた異色の傑作となった。にもかかわらず、ラロの作品で演奏されるのは『スペイン交響曲』ばかり（他には『イスの王様』序曲が若干演奏される程度）で、そもそもラロにソロを伴わない『交響曲』が存在すること自体全くと言っていいほど知られていない（僕自身、コントラバスの藤井君がこの曲を推薦するまで知らなかった）。今回の僕たちの演奏は、おそらく日本初演になると思われる。確かにヴィルトーゾたちを満足させるヴァイオリンの超絶技巧という点で『スペイン交響曲』は素直に「凄い」と感じる。しかしながら、難しい音楽に真剣に対峙して得られる充足感という、クラシック音楽を聴く醍醐味は、この交響曲ト短調の方がはるかに深いと思う。今回の僕たちの演奏が、この知られざる傑作交響曲の真価を知らしめるきっかけになることを願ってやまない。

注1：毎日新聞 2011年9月27日・朝刊

注2：今谷和徳・井上さつき『フランス音楽史』2010, 春秋社

注3：石多正男『交響曲の歴史』2006, 東京書籍／吉松隆『「運命」はなぜハ短調で扉を叩くのか？ 調性で読み解くクラシック』2010, ヤマハミュージックメディア



## 京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様	西坂 壽美子様	岡 喜久彦様
杉本 幸子様	小松 朋美様	山本 均様
安藤 美知穂様	鈴木 一俊様	古川 宏様
遠藤 時金様	辻 良治様	竹野 繁也様
鎗本 和弘様	西 英子様	市川 寛様
谷口 佳隆様	浅野 節子様	出村 勝正様
吉田 育弘様	福田 稔様	河内 尚和様
吉田 寛子様	金谷 一紀様	坂口 尚史様

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。（11月現在）



### ♡「友の会」会員随時募集中♡

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

- 【年会費】 1口 1,000円 【期間】 ご入会いただいた月より1年間
- 【特典】
1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
  2. その他演奏活動のご案内
  3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: tomo@kyotophilolo.com



# 京都フィロムジカ管弦楽団

## PHILOMUSICA ORCHESTRE DE KYOTO

### Violons

芦原 靖子  
Violon solo : Abe  
小幡 拓也  
村中 三喜保  
Violon solo : Massenet, Lalo  
山口 陽平  
飯田 俊也・  
井村 有里・  
木村 誠志・  
新庄 元子・  
西邨 奈穂・  
西村 祐司・  
増岡 昌幸・  
丸山 圭一・  
三村 真偉子・  
安江 絵美子・  
渡辺 達之輔・  
大和田 健介※  
北原 由紀子※  
豊嶋 千有希※  
西澤 理会子※

### Altos

塩井 淑野  
乙竹 泰・  
國分 絵里香・  
高原 友洋・  
八軒 静香・  
森園 博章・  
山本 亮太・  
上田 秀樹※  
吉川 昌毅※

### Violoncelles

小野 健太郎  
多田 進  
Ian Dickinson  
岡崎 有紗・  
塚田 毅・  
西山 峻司・  
秦野 貴生・  
岡野 正義※

### Contrebasses

茂原 尚樹  
田中 郁太郎  
鳥山 拓  
中平 明江  
藤井 輝之  
丸山 拓史・

### Flûtes

石川 樹子  
江藤 佳美  
海堀 梓  
谷本 佳織・

### Hautbois

栗山 才子  
坂田 翔太郎

### Cor anglais

須貝 絵里・

### Clarinettes

関 英子  
南井 菜穂子

### Bassons

石塚 有里子  
橋場 まり・

### Contrebasson

竹中 勇太※

### Cors

片山 真吾  
草木 美佐子  
黒田 直樹 JAMES  
坂口 裕志  
長岡 武志

### Trompettes

遠藤 啓輔  
作山 智  
竹内 恵理  
中西 美智子  
山口 鮎美・

### Trombones

馬瀬 英明  
宮下 秀行

### Trombone-basse

藤井 舞

### Tuba

中塚 隆介※

### Timbales

梶井 渉※

### Percussions

大塚 恵一※  
奥川 綾※  
野澤 真未※  
福田 理奈※

### 顧問

和田 之宏

### 団長

長岡 武志

### 事務

西村 浩  
(事務局長)

邑橋 明子

・ : 団友

※ : 客演奏者

### 弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

### 管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。



# 京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

## ♪第31回定期演奏会♪

2012年6月3日(日) 京都府長岡京記念文化会館

リルバーン / 『島の歌』  
ベートーベン / 交響曲第1番  
マニャール / 交響曲第3番

指揮：柴 愛

(予定)

## ♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。

「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。

### <募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス (弦楽器急募！！)

オーボエ・ファゴット・ホルン・打楽器

※管楽器・打楽器はオーディションを行っております。

〔練習日時〕 毎週日曜日 午後1時～午後5時 春と秋に2泊3日の練習合宿(大津市内)

〔練習場所〕 京都芸術センター、および河原町丸太町・荒神口周辺など京都市内各所

〔諸費用〕 活動費：3,000円/月 合宿費：15,000円程度 演奏会参加費：20,000～30,000円(学生は半額)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: [recruit@kyotophilo.com](mailto:recruit@kyotophilo.com)

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。